
遠く

Ri

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遠く

【Nコード】
N9498A

【作者名】
R i

【あらすじ】
あの少年は薄汚い屋上を綺麗だと言った。死ぬ直前に見たいのは此処からの景色だと言った。やがてその時が来て、命を断つ時に想うのは、

下から見下ろす景色というのは何故こつも美しいものなのだろう。
己の足がコンクリートに張り付いている時にはけして見えない極上の景色。

赤い夕暮れに浮かぶ朱に染まった曇達。

高いビルの合間から漏れる日光がまた綺麗だと思った。

こんな素晴らしい日に死ねるなんて。

俺はなんて幸せな人間なんだろう。

小学生の時に引越してきて住み慣れたマンションの最上階にある立ち入り禁止の扉。開いてみるとやはり思ったとおり、ここは屋上だった。

「あ」

なんて綺麗な景色なんだろうと思った。

他の人から見たらなんてこと無い景色なんだろう。

写真で示されても何も感じないのだろう。

俺だけが美しさを感じることが出来る薄汚い屋上。

空になった安い発泡酒の缶や泥が付いたコンビニ袋が転がる空間。
屋上へ入るためのドアは錆び付いていて、ドアノブを回そうと手を掛けると掌に赤錆が付いてしまう。

美とはかけ離れた空間なのかもしれない。それでも此処にいと救われた気になるのは何でだ？

胸の奥の方が誰かに驚掴みにされているようだ。切なさがこみ上げてきて気を抜くと泣いてしまいそうだった。

遠い君を想った。

彼に出会ったのはたった2ヶ月前だった。俺は真夜中に一人でコンビニへ行っていて、その帰り道だった。

ある公園で多量のガソリンを浴びようとしている男を発見したのは。

「…何やってんの」

彼に近付き問掛けた。別に返事をしなくても傍らに置いてあるライターがこれから何をするかを物語っていた。

彼はにっこり笑って、

「自殺」

と言った。死ぬ間際の人間ってこんなに穏やかで無邪気に笑えるものかと思った。

「…でも、やめた!」

彼は100円ライターを足元に転がした。

「何で止めんの?」

「君が来たから」

迷わずに彼はそう答えた。わけが分からない。見ず知らずの赤の他人にたまたま現場を目撃されたからってこんなに簡単に諦めることが出来るんだろうか。

「ねえ、それ」

彼は俺が持っていたコンビニの袋を指さす。半透明な袋には微かに先ほど買ったばかりのビール缶のパッケージが透けていた。

「それ、ちょうどいい」

明らかに俺より歳上の彼はそう言った。

「……まあ、いいか」

別に酒が飲みたかったわけじゃない。ただ家に居たくなかったからコンビニへ行ったようなもんだ。

それから俺達は月明かりも無い公園のベンチに座ってビールを飲んだ。

初めてビールを口にしたときと同じ、ただ苦味だけが口内に拡がった。

「そいえばさ」

彼が口を開く。

「あんた、だれ？」

「……たまたま此処通りすがった人」

「名前は？」

「……悠」

「ユウ」

確かめるように彼は俺の名前を繰り返した。

「あんたは？」

「俺？」

お前しかいねーよ。確かに目の前の男は俺より歳上だが、だからといって言葉使いを正す気にもなれなかった。

「俺はあ、えつと、アキ！」

酔っぱらってんのかな。名前を言うのに少し躊躇った感じもしないでもない。疑うことしか知らない俺の脳は次々と質問をしてくる。

「そう…」

「自分から聞いたくせに、ユウは冷たいんだな」

「まあね」

「俺がガソリン被ろうとしてんのにたいして気にしてなかったしな」
「……………」

けらけらと笑うアキ。

でも瞳の奥を見るとどうやら本気の笑いではないようだ。

いつからだろう。こうやって相手の顔色ばかり伺ってきたのは。嘘を吐かれるのが嫌いなんだ。

…なんで嫌いなんだっけ？

「ああ、でもさあ」

長い笑いの後、微笑みながらアキは俺を見た。俺は視線を合わせな

いように真正面にある公園の木に興味を持ったふりをした。

「でもさあ、ユウ。さっき俺が本気で死のうとしても、」

アキが低い声で呟く。さっきまで作り笑いをしていた人間と同一人物だとは思えないほど低く冷淡な声色。

「どうせ止める気、無かったんだろ？」

何故かアキはとても楽しそうにそう言った。

楽しそう、というよりおかしくておかしくて仕方がないといった感じだ。

俺は、

「……………そんなこと、ないよ」

怖かった。

アキは気が狂っていると思った。これ以上面倒事に関わる義務はない。

「じゃあ、俺行くわ」

極めて平坦な口調を努めた。

アキに背を向け歩き始める。

アキが後ろから何か言ったような気がした。

それでも俺はふりかえらなかった。

あの晩、アキに出会ってから何か会った。

…なんてことはない。何もかもが普通だった。いつもと同じように真昼に起きる。床に投げられた制服は埃を被りうつすらと白くなっていた。俺の部屋は足の踏み場なんてひとつも無くて。そこら中に広がるゴミの山を蹴り上げながら部屋を出た。

「……お、はよう」

作り笑いで女が俺に挨拶してきた。どいつもこいつも作り笑いだらけだ。誰も本当をさらけだそうとなんてしない。

いつものように女を無視して、いつものように必ず用意された昼飯を食べる。

普段は女が部屋の前まで運んできてくれるが、今日はたまたま気分が変わった。

女は居場所を無くしておろしている。いるはずの男はもう居ない。俺はご飯を箸で摘むが食べることが出来ないまま。ああ、テレビが騒がしい。

ふと目線を反らす。女が俺を凝視していたからだ。興味もないテレビに興味を持つふりをする。

『……害者は4名、重体は1名のようにです。昨夜9時ごろ人気……』
頭の中に妙に着飾ったニュースキャスターの言うことが入らない。それでも俺は聞き取った。

『……ロックバンドのアキさんがライブ中に失踪。現在も行方が分

からないそうです。メンバーは何故アキが逃げたのか理由も分からない、とコメント……」

流れる映像に昨日出会ったアキが居た。彼は真つ赤なギターを掻き鳴らしながら狂喜に浸っているようにも見えた。赤いギターはとも映えた。ギターに詳しくはない俺はそれがどこのものかすら分からなかったが、アキが持つにふさわしいギターだということは確かに感じた。

昨日の夜に失踪したなら、俺らが出会ったのは真夜中だ。

失踪後に会った彼は自殺を試みた。俺と出会ってビールを一缶飲み干して、それで俺が逃げ出した。

残された彼はどうなった。もう一度自殺を試みたか。なら身元不明の焼死体がまだ公園に残されているはずだ。ああ、でももう真昼だから死体は持つていかれたかもしれない。

俺が試行錯誤している間に女は居なくなつた。机にはメモが残され、細く小さな字で買い物に行つてきます、と書かれていた。

いつからだっけ。あの女をただの女と見始めたころは。

記憶が残らないのはとるに足らない出来事だったから。それとも防衛本能か。

彼女の細い字は幼いころ俺に文字を教えてくれた。宿題が出来なくて困っていた俺にヒントをくれた。女の細い字はいつも俺を助けてくれたはずなのに、なぜか残されたメモを見るのが怖かった。

俺はいつの間にか臆病になっていた。

夜を待とうと思った。真夜中になってから公園へ行き、アキの死体を探そうと思った。

出来ることならあの細い指を持って帰りたいかった。瓶にホルマリン溶液をなみなみ注いで、彼の焼けた指をぽとりと落とす。ホルマリンが役に立つのか、もう焼け焦げているから関係ないのかもしれない。それでもやはり俺はホルマリン溶液に指を落とすだろう。独特の臭気が躰にまわりつく前に蓋をきつくしめる。

俺はそれを眺めながらひたすら現実から離れ、ただ眠りたいと思
った。

その晩は嫌に曇が多い夜だった。小降りの雨がうざったらしく髪に染み込む。連日外に出るなんて、そんなの珍しいことだった。昨日曲がった角をくねる。広い道は出来るだけ避けて公園を目指す。

厚ぼったい曇のせいで月が出ない夜だった。公園に居たのは昨日と同じ姿のアキ。

「……あ、ユウ」

じつとブランコに腰かけていたアキが俺に気付く。

「今日も来たんだ」

彼は何でもないという風にそう言った。アキの隣には錆び付いたブランコがもう一席用意されていた。何故か俺の為に用意されているのだと思った。

「あんた、世間一般じゃ行方不明らしいけど？」
「らしいね」

うつ向きながら淡々と話す。俺は隣に腰かける。

彼の指が欲しかった。欲しいものが手に入らないというのは非常に不快になる事だ。幼いころは色々欲しかった。流行りのゲームが欲しかった。自身の身長ほどもあるぬいぐるみが欲しかった。色鮮やかな絵本が欲しかった。大きく栗色をした犬が欲しかった。

ひとつくらい手に入れたっていいはずなのに、俺は何ひとつ手の中に収めることが出来なかった。

俺は指が欲しかった。

「……なに？」

俺はアキがブランコの鎖に絡み付ける指を見つめていた。

「……欲しいんだ」

「何が？」

「指が」

へえ、と言って大した興味もなさそうに自分の指を見つめるアキ。

「じゃあ、あげようか？」

「くねんの？」

「いいよ、別に。俺もうすぐ死ぬし」

「何で死ぬの？」

「くだらないから」

そう言うアキの目は笑っていなかった。昨夜とは違う。笑顔の偽造も誤魔化しも無かった。そこにあるのは空より黒い瞳だけだった。雨がまとわりつく。気持ちが悪い。

「死にたいんじゃないって生きていたくないんだ。この指もこの声も、大した価値は無いって解ったから。楽しいことなんて一つも無いことに気付いたら、此处にいる意味が解らなくなった」

出来るだけ淡々と。生への執着など少しも見せないように。

出来るだけ目を反らす。助けて欲しいことなんて気付かれないように。

自分に酔ってたいんだ。皮肉を言うつもりなんてないけれど、周

りがそう受け止めるから仕方ない。

なんとなく俺とアキは似ているような気がした。きっとあの屋上に連れて行ったら彼もその素晴らしさに打ちひしがれるだろう。死にもせず、生きもせず。

「指」

不意にアキが手を差し出す。

「欲しいんだろ？」

蛾がひらひら舞う電灯以外に光の無い公園で。自らの手を差し出し指の切断を促す彼は艶っぽく見えた。

しかしそれは俺を貶めようとする姿にも見えた。

指はすぐにでも手に入れたかったが肝心の道具を持ってきていなかった。関節から綺麗に切断するには只のナイフじゃ話にならない。きっと骨でつつかかってしまうだろう。

でももうすぐその綺麗な指が透明な瓶の中に入れられると思うと興奮を禁じえなかった。

思ったより俺は変態なのかもしれない。

「また明日、ここに来れる？」

「いいよ」

「アキは痛いのが好きなの？」

「嫌い」

「でもたぶん指切るとすげえ痛いよ」

「じゃあ、明日死ぬから。その後俺から切り取ってよ」

こうして真夜中の談義は終わった。アキも俺も幸せだった。

アキは現実からの逃避行を望んでいた。

俺はアキの真っ白い指を望んでいた。

万人が非難を浴びさせるであろっ、細やかな願いは叶えられるのをただひたすら待っている。

俺たちにはそれを叶えてやる義務があった。

朝目覚めると酷く頭痛がした。こんな頭痛はほとんど連日続いてきたから気にも止めなかったが今日の頭痛は一段と激しく波打つような痛みだった。

それはいつそのこと痛覚を感じとる神経を全て抜き取り痛みも何も感じない無防備な姿になってしまいたいほどだった。世界には稀にこのような奇病があるらしいが、もって産まれた病気なら良い。一度痛みの快楽を知ってしまったら後悔ばかりが残るだろう。

別に俺はマゾヒストな訳じゃあない。けれど絶え間なく続く偏頭痛を愛しく思うのもまた事実だ。

さて、これから必要な物を集めなくては行けない。最低限アキの指を切断するものが無くては話しにならない。それから透明な瓶を買おう。アキの指が映えるように、飾りなんて付いてなくてありきたりの瓶を。

夜中以外に外に出るなんて本当に久しぶりで。

高校に行かなくなつてからは真っ暗にした自室でパソコンの明かりだけを頼りに生きてきた。

髪は初め長くなつたらその度に自分で鋏を使い切っていたが、それも面倒になってやめてしまった。今では前髪は頬に掛るほど伸びていて後ろ髪は肩に付きそうなくらい伸び放題になっていた。それでも生まれもったくせ毛が幸いか。久しぶりに鏡を見てみたら確かに伸び切った髪はうつつうしいが、それはパーマをかけているように見えなくとも無く。少なくとも変質者に見られない程度になっていた。

自分の姿を確認した後、黒いTシャツに暗めのジーンズを履いた。くたくたになつたスニーカーを履き、俺はとりあえず近所のホームセンターに行くことにした。

ホームセンターでは今夜一番の主役、アキの指を切り落とすナタを買った。一番刃渡りが長く、一番鈍い色をしたナタを買った。思ったより高くついたが女が金をくれたので特に問題は無かった。その後にアキの指を入れる瓶と軍手を購入。最後にCD屋に寄った。アキのギターが聞きたかった。アキの声も聞きたかった。

CD屋を出る途中、俺が通っていた高校のやつらがいた。時間の感覚が鈍っている俺は初め見た時はぴんとこなかったが、今日は確か平日。大方学校をサボってふらふらうつっているんだろう。やつらとすれちがう時、俺は当然の如く無視をした。やつらは俺のことに全く気が付かない様に馬鹿笑いして通りすぎて行った。いや、本当は気付いていたのかもしれない。頭の中でデジャブが起きる。重なる相手は今はいない。本当は俺のことに気付いているくせに。真っ直ぐ見てくれることすらしてくれない。

家に帰って汚い自室に引き籠る。どうやら女は帰ってきているようだ。うだが姿を見せようとしれない。もっとも別に見たくはないが。

古い錆び付いたコンポにアキのCDを入れる。耳鳴りに似た高音のギターが響く。ドラム、ベースのリズム隊がアキの音と重なる瞬間、絶叫にも似たアキの叫び声が聞こえた。

“ 僕は今日 あの子を殺しました
切なくて悲しくて 涙が出ました
僕はあの日後悔しました

苦しくて泣きたくて 涙も出ませんでした

あの子が残虐なことを言うから
僕のことを大好きだと言うから

眩しい笑顔は僕には少し明るすぎました
あの子と手を繋ぐには僕は少し汚すぎました

愛してる

大好きだ

君といると 全てが眩しいんだ

鋭利な包丁を降りかざして

僕、独り 堕ちる

さようなら なんて

またすぐ会えるのに”

ベースの重低音が心地好い。アキの赤いギターは汚らしいファズを垂れ流していた。この演奏が巧いのか下手なのかは俺には分からない。もちろん曲調も、歌詞も。それでもけして万人から求められる歌では無いけれど、求めて止まぬ人たちがたくさんいるのだろう。

俺はもうすぐ飛び立つアキの為に、少しだけ泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9498a/>

遠く

2010年11月19日23時49分発行